

東京女子高等師範学校卒業生のライフコースにおけるコーホート間差異  
—大正末期および戦争末期卒業コーホートの職業生活を中心に  
○古谷恵子 湯沢雍彦 (お茶の水女大)

【目的】東京女高師卒業生の約70歳までのライフコースをコーホート間で比較し、20年の時代の違いを通じて、何が変わり、何が変わらなかったのか、東京女高師卒業生にとっての時代効果を職業生活を中心に明らかにする。

【方法】東京女高師の昭和18～20年卒業生全483名を対象に、ライフコース全般と職歴について、質問紙による郵送調査(1994年6～11月・回収率74.7%の384名)と訪問面接調査を実施、20年前にも実施した大正10～14年卒業生対象の同様の調査結果と比較を行った。

【結果】世代を越えて一貫していたものは、共に平均24.8年の長期にわたる教職中心の職業人としてのライフコースである。教職は当時の女性に開かれた僅少の誇り高き職業の一つであり、その教職に就くべく教育を受け、義務として即就職したこと、さらに教育界での東京女高師の知名度の高さからくる自負と安定感が加わり、ここまでライフコースを規定することになった。しかし大正末期卒業組に比べ、戦争末期卒業組は共働きの困難度合いが高く、その要因となった背景には大きな違いがあることが判明した。①戦後の女性の職場の広がり、既婚女性の外働きに対する抵抗感の縮小は、初職が教職に決定されていた女高師卒業生にとっては、共働きと長期勤続を促進する効果はあったものの、逆に職種の高まりは手伝人の供給減につながり、育児など家庭との両立問題が生じて戦争末期卒業組の困難度を増すことになった。②戦争がもたらした生活難の影響で、戦争末期卒業組にとっての教職は、生きていくための糧を得る手段としての意味合いを強めた。この働かざるを得ないという状況は困難度を高めたが、結果的には長期勤続のきっかけともなった。